



半月鏡の
幽霊

川崎ゆきお

これは怪談話なのだが、はっきりとしない話だ。まあ、幽霊など、はっきりとした存在ではないので、そんなものだろうか。

室田は毎日その喫茶店へ行っている。そして座る席はいつも同じだ。窓際の明るい席で、本を読むには都合がいい。というのもこの喫茶店、特にレトロな感じではないが、昔の喫茶店なので照明が暗い。そして、かなり経つが、内装はそのまま。テーブルや椅子、照明器具も同じだ。

室田は活字を追いながらも、たまに弓形のクラシカルな窓から通りを見る。当然そちらは眩しい。わざわざ見なくてもいいのだが、動くものがあると気になる。それは通りをゆく人や自動車だ。本と外とは同じ視界に入っているので、ついつい見てしまう。これは面白くない本を読んでいるときに多い。

幽霊が出るには、あるタイミングが必要なようだ。

雨が降り、昼間なのに夜のように薄暗いとき、喫茶店内の方が明るくなる。いつもなら昼行灯のように目立たないのだが、その電球の明かりが眩しく輝く。また、窓際は太陽光の色だが、そんな日は暖かな電球の色目になる。本の紙の色まで違ってしまう。いつもは白っぽいのだが、そういう日は赤みがかかる。喫茶店が急に夜になったような感じだ。これでお膳立てが揃った。

室田が本を読んでいる位置から、右に窓、真正面に煉瓦の壁が見える。そこに出る。

壁に出るのではなく、壁に埋め込まれている左半月の鏡に出る。直径一メートルほどもある枠だが、鏡は左半分だけ。壁は煉瓦を組んだもので、鏡の外枠も煉瓦で円を描いている。煉瓦の向こうは、お隣のテナントだ。

幽霊が出るのはこの鏡だ。映っているのである。

室田は最初それを見たとき、すぐに左横を見た。その周辺が鏡に映っているためだ。当然誰もいない。

店の人にそれとなく聞くと、笑われた。当然冗談だと思われたのだろう。長く店をやっているので、そんなことがあれば知っているはず。しかし本当に知らないらしい。ここで怪談は終わっている。

しかし、室田は大きな手柄を立てたように、まさに幽霊の首を取ったような気になり、他で吹聴した。

しばらくは、幽霊の出る喫茶店の半月鏡として、ネットにも上がり、それなりに拡散した。

しかし、その正体はすぐに分かってしまう。通りを歩いている人が映っただけなのだ、と誰かが指摘した。

富田も、薄々そうだろうとは思っていた。丸みを帯びた窓格子なので角度や反射の関係だろう。しかし光の織りなす悪戯よりも、幽霊に持ち込みたかったのだ。出ても決しておかしくない雰囲気なので。

そのため富田はこの怪談を捨てきれないようで、通りを歩いている人が映っていたとしても、その人が実は幽霊で……と、苦しい説明を加えた。

雨の降る薄暗い真っ昼間、幽霊が歩いているのも悪くはない話だ。その人だけが傘を差していない。こちらだけ抜き出した方がよかったのかもしれない。

これには後日談がある。この鏡と窓ガラスの関係では、どんな反射にせよ光学的に外のものを

映し出せないのではないかと。

さらに、どんな姿の幽霊だったのかを富田は一切語っていないことも、妙と言えば妙だ。怪談ではなく妙談かもしれない。

了